



Title	京都語におけるハル敬語の展開に関する社会言語学的研究
Author(s)	辻, 加代子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45700
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	辻 ^{つじ} (川原 ^{かわはら}) 加代子 ^{かよこ}
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 19135 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 17 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	京都語におけるハル敬語の展開に関する社会言語学的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 真田 信治 (副査) 教 授 土岐 哲 助教授 渋谷 勝己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、京都・大阪を中心とする近畿中央部で隆盛を示している「ハル敬語」（～ハルという形式による待遇表現）をとりあげ、近畿中央部方言話者の中でも「ハル敬語」を最も高頻度、かつ広範囲に用いるとされる京都市方言話者に焦点をあてて、その複雑な構成体を、その変容する姿のままに包括的かつ体系的に記述したものである。

論文は、方法論的な考察を行った第一部：序論（第 1・2 章）、現代京都市方言の「ハル敬語」の共時的考察を行った第二部：本論（第 3～7 章）、ハル胚胎期以降の京都語の敬語に関する通時的考察を行った第三部：補論（第 8～10 章）から構成されている。

第 1 章では先行文献を参照しつつ、現代標準語の敬語の特質とは何かを考え、対象フィールドの方言敬語を記述するために採った分析の枠組みを示し、第 2 章では調査の方法、分析の手順等を示している。

第 3 章では現代京都市方言・中年層女性話者の「ハル敬語」について考察、くだけた場面における敬語運用とハルの全体的意味機能の概略を示している。第 4・5・6 章ではそれぞれ高年層女性話者、最高年層女性話者、および若年層について考察している。女性話者の全年層について概観すると、最高年層話者から中年層話者へと年齢が下がるにしたがって絶対敬語的な運用特徴が薄まり、尊敬語的色彩も薄まり、「三人称指標」的な特徴が増してきていることが分かった。第 7 章では男性話者について考察している。話し相手待遇に関しては男性話者と女性話者との間に違いは認められないが、第三者待遇に関しては、使用する待遇表現形式の数、および運用のすべての項目について違いのあることが明らかになった。第三者待遇において男性話者は上位待遇の待遇表現形式と下位待遇の待遇表現形式を待遇的な扱いと形式を対応させる形で使い分けている。具体的にはハルを尊敬語用法で用い、ヨル・トル・オルを下位に待遇する軽卑語として用いている。それに対応して派生的機能に関しても、プラスの感情・評価をハルで、マイナスの感情・評価をヨルで、というように形式と機能を明示的に対応させる形で用いているわけである。

第 8 章では江戸時代後期京都語の状況について京都板の対話体洒落本を用いて考察している。第 9 章では同じく洒落本資料を用いて女性の敬語運用とナサル・ナハル・ヤハルについて詳細に考察している。第 10 章では落語関係資料を用いて明治期の敬語運用状況について考察している。そして、最後に通時的観点から江戸時代後期から現在にいたるハルの意味機能の変遷を概観し、全体のまとめを行っている。

論文審査の結果の要旨

本論文の特長は、現代日本標準語の敬語の枠組みにはまりきらない京都市における方言敬語形式～ハルによる表現の全般的な記述を試みたことにある。京都市方言の「ハル敬語」の性格をめぐっては、先行研究でも使用例を提示しつつ、さまざまな解釈がなされてきたが、本論文ではそこに提示された使用例をすべて包含できる枠組みを提出したのである。

現代日本標準語の敬語の記述においては、敬語の使い手による違いは普通あまり大きな問題とはされないが、当該方言では男性話者と女性話者で敬語運用や使用語彙に大きな異なりが認められるため、話者を性別に分けて記述がなされている。「ハル敬語」についてはとくに女性話者に使用頻度が高く、適用対象の範囲が広い。本論文では、中年層女性話者の談話資料を考察の中心にしつつ、男性話者や中年層以外の女性話者についても資料を得て実態を分析し、年層による尊敬語的色彩の薄まり、「三人称指標」的な特徴の増大について明らかにした。また、この通時的考察を談話資料から文献資料へとつなぎ、「ハル敬語」の胚胎期にまでさかのぼって考察し、現代京都市方言の敬語運用および「ハル敬語」が展開するにいたる京都語における敬語の土壌の一端を検証した。

従来の敬語史研究においては、研究の焦点が中央語ないし標準語におかれ、方言敬語の研究は標準語の分析枠組みによって行われ、運用面の地域性はともすれば中央語の変化過程から帰納した尺度ではかれ、序列づけされてきたきらいがある。しかしながら、本論文においては標準語とは運用自体が異なる方言独自の論理・尺度を発見・提示できたのである。

資料の取り方や扱い方にやや不十分なところが見受けられ、文章にやや冗長なところが目立つが、実証的な記述に徹し、それに基づいて方言独自の敬語運用機構の実相を明らかにした点で、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。